

惑星サダラのサイヤ人

惑星サダラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作の一昔前、惑星サダラにサイヤ人として転生したオリ主。

惑星サダラはサダラ王国とベジータ王国に二分され、熾烈な種族間戦争が展開されていた。

目

次

サダラに転生

母と奴隸

村で修行

左手に光を、右手に剣を

7人の敵

29 23 14 6 1

サダラに転生

なんだこれは？ 知識が、光景が、音が、直接頭に入つてくる。言語があつという間に記憶される。もう喋れる？ いや、口の筋肉は上手く動かせないかもしない。いや、動かせるかもしない。俺はサイヤ人だから。

うん？ 俺はサイヤ人なのか？ ドラゴンボールのサイヤ人。頭の中に直接入つてくる知識が、俺の知つているドラゴンボールの知識とある程度一致する。

俺はサイヤ人に生まれ変わったのか。そして現在、よく分からない教育装置で直接言語や常識を覚えさせられている。

「目覚めたか、ゴギョウ。俺は父親のセリだ」

「あんた、こういうのは母親が先に名乗るもんでしょう？」

「そ、そうなのか？」

「まつたく。私はあんたの母親のナノハナさ。よろしくな、ゴギョウ」声が聞こえた。意識すると目が開き、視界が現れる。

片目片腕のいかついおっさんと、筋肉質できつい顔の若い女がいた。二人が両親らしい。見た目はすごく怖い。いや、実際にとんでもなく恐ろしいだろう。前世のヤクザなんて裸足で逃げ出すレベルで。それがサイヤ人だから。

周囲には俺が入っているのと同じポッドがいくつも並んでいる。その中には赤ちゃんが一人ずつ入っている。

俺は、両親に返事をしてやつてもよかつたが、一応赤子を演じることにした。俺は2人を軽く見てから、目をつぶつてあくびをした。

「おいおい、無視かよ」

「いや、この子私の眼をしつかり見たよ。相当賢いね」

「まあ賢さはどうでもいい。問題は強いかどうかだ」

そうしてサイヤ人としての人生が始まつた。

まずは原作のどの時期か知る必要があつた。カカラットが生まっていたりしたら残された時間がもうほとんどない。しかしその心配

は杞憂だつた。現在俺が住んでいるのは惑星ベジータではなく惑星サダラだつたからだ。

惑星サダラは確かサイヤ人がもともと住んでいた星だ。しかしさイヤ人の種族間の争いで誰も住めなくなり、サイヤ人は惑星ベジータに移住せざるをえなくなつた。サイヤ人は乱暴だからな。ありえる話だ。

ここが第6宇宙だつたなら、話は別だがな。原作で第6宇宙のサイヤ人は穏やかだつた。内戦などせずそのまま惑星サダラに住んでいた。

俺のいる星は、第7宇宙の惑星サダラだと思う。なぜなら、この星は現在サダラ王国とベジータ王国に二分されており、その両国で戦争中だからだ。

原作通りならベジータ王国が勝つんだろう。その時の戦争がきっかけで惑星が汚染され、移住を余儀なくされてしまふのかもしれない。移住は別の戦争の影響かもしだいが。いずれにせよ、俺はかなりやばい状況だ。俺がいるのはサダラ王国だから。このままではベジータ王国に負けて死ぬ。きっとベジータ王は捕虜など取らず、子どもでも構わずに殺す。そういうやつだよ彼は。

フリーザとの戦いには時間があるが、ベジータ王との戦いは近い。俺は全力で鍛えねく必要があるだろう。力がなければいろいろとうまく進まない。自分を鍛える中で、宇宙船の確保も必要だ。

この星には賢い宇宙人が何人かいる。そいつらと仲良くなつて宇宙船を譲つてもらう。もしくは強奪する必要がある。

よし、予定はそんな感じでいいだろう。早速修行を始めよう。
と言つても赤子の身でこんなポッドの中じやあ体を鍛えるのは無理だからな。気のコントールの練習から始める。

気を爆発させる方法は教育装置の映像で教えられている。体の内側のエネルギーを感じ、それを盛り上げ、身体にみなぎらせるという感じだ。

早速やつてみる。

「ふつ、ぐつ」

内側に力を入れると、自然と声が出る。まあ原作でも声を出していたし問題ないだろう。

そんなことを長く長くも続けていた。ミルクの時間、就寝の時間、ハイハイの時間、教育プログラムの時間、以外は常に気を高める練習を続けていた。

そして2ヶ月が過ぎた。俺は「はつ」という掛け声と共に、そよ風を起こすことに成功した。

「、これが気か。いやほおおおおおおおおおおおおお！」

俺は喜びのあまり大声で叫んでしまった。周りの赤子が一斉に泣き始めてしまった。

「ブ、ブロリーミたいなのは、いないよね？」

それからさらに一ヶ月。俺はビーデルが出したような小さな気弾を手のひらから出すことに成功していた。そんな中、科学者が俺の元にやつってきた。サイヤ人ではないが、人間のような顔の科学者だ。「教育プログラムは今日で終わりだ。君はなかなか数字がいい。エネルギーボールも作れているようだしね。今日は試験を受けてもらう。本気でやるようだね。いいね」

ほう、試験か。確かこの試験の成績が良ければエリートへの道が開けるはず。

エリートと言つても王の護衛じやなくて科学班だけどね。それでも科学を発明するわけじやなくて、異星人が言つている科学を理解し、騙しがないかチェックするだけ。それがものすごくしんどいわけだけどね。

まあ、俺の目的のためには科学班になつた方がいい。本気で受けちゃいましょう。

試験の後、母親がやつてきて俺を引き取つた。

科学者は母親と話しかけた。

「すばらしい成績です。この試験が始まつて以来の天才と言つていいでしよう。ぜひ科学班に」

「今は戦争中さ。私たちに必要なのは科学よりも力だ」

「い、いえ。科学こそが戦争に役立つのです！」

「なんだ？ 私に口答えする気か？」

「い、いえ。そうではなく」

「ふん。臆病もんが。あんたらみたいなのにうちの子が任せられるかよ」

男勝りな母親は科学者を一蹴し、俺を抱きかかえ、家へ向かう。

初めて施設から出た。周囲はぼつぼつと草木が生えている荒野だつた。家やビニールハウスみたいなやつもちらほら見える。

昼だが、空は濁っている。空気も埃っぽい。戦争の影響で環境が汚染されているのだろうか。

母は俺を地面に置いた。俺は二本足で立つ。

「あんた随分優秀らしいからね。走れるだろう？」

「ええ、はい」

「なんだいその返事は。サイヤ人ならシャキッとしたしな」

母は俺の頭を軽く小突いた。動作は軽かつたがとても痛い。これは気の影響か。

「ほら、言い直しだ。シャキッとして。こう、走れます！ つてな」

母はキリツと氣をつけをして言つた。軍人っぽいな。

「ほら、言つてみな

「走れます！」

「そうだ。その調子だ。もう一回言つてみな」

「走れます！」

「ようし、そうだ。じゃあ付いてこい」

「は、はい！」

母はぴょーん、ぴょーん、と跳ねて走っていく。

速すぎませんかね？ おそらく前世の俺の全力並みに速いと思う。

俺は小さな体をかなり前傾させ、足をくるくる回して駆ける。サイヤ人の筋肉はすさまじく、前世の赤子ではありえない速さで足が回るが、さすがに前世の大人のスピードには追いつけない。ブロリーなら追いつけるかもしれないが俺はそこまで化け物ではない。

俺は気も利用して全力で走るが、母に引き離されていく。これ以上

は本当に無理。それに呼吸もしんどくなつてきただぞ。

「はあ、はあ、はあ」

と、前を行く母の姿が消えた。

「さすがにこのスピードは無理か」

「うひつ」

母は一瞬で俺の横まで来ていた。驚いて変な声が出てしまつた。
しかし、感動もした。これがサイヤ人のスピードとやらか。

その後、母は俺の少し前を走り続けた。俺がちょっと力を抜くと
「コラ！」と言つて怒り、頭を小突いた。赤子なのに。鬼か。

俺はほとんど全力に近い速さで3キロくらい走らされたと思う。
家に着いたとたんに大の字になつてぶつ倒れた。何度も死ぬかと思つた。前世の感覚で言えば、1キロくらいの時点では呼吸は既に限界
だつたが、さすがはサイヤ人。そこから驚異的な粘りが可能だつた。
足も肺も、動けと念じれば動いた。

「はひゅーつ、はひゅーつ、はひゅーつ」

「ふふふふつ。優秀じやないか。こんな子を科学者にするなんてやつ
ぱりありえないぜ。お前はサイヤ人最強の戦士になるんだ。なあゴ
ギョウ」

母は満面の笑みで言つた。

やはりサイヤ人。子どもは最強であつて欲しいらしい。

しかし、どうだろうなあ。強くなつて原作の敵を倒すとかはやつて
みたいけど、こんなに苦しい思いはするのはなあ。

母と奴隸

2歳までの俺の日課。母との地獄の訓練。食事。就寝。

まさに訓練と食事のみの日々。何度死ぬかと思つたことか。おかげで気功波が撃てるようになりました。ジャンプすれば10mくらいの高さまで飛べます。

強すぎる、サイヤ人。

2歳のある日、母が俺に言つた。

「奴隸のしつけ方を教えてやる。ついてきな」

いえ、教えていただかなくて結構です。

と言えるはずもなく、黙つてついていった。

母はまず村長の家に入り、何か紙を持つてきた。

地図と住民の名前が書いてある紙だ。

「ほら、地図に番号があるだろう。例えば1番は村長の土地さ。その中にいる異星人は村長の奴隸つてことになる。保育施設や病院も村長の土地だ。うちの土地は、7番だ。探してみろ」

「こ」が家。でも「こ」とか、「こ」とかも7番だね

家の周りは7番の土地。しかし飛び地が細かくあつた。

「そうさ。今は戦争があるだろう？ 戦死した連中の土地がうちらに回つてきてるのさ。だから飛び飛びになる。と言つてもうちの旦那は村で7番目だからね。土地の分け前も7番相当になるのさ」「なるほど。そういうシステムか。

「うちの奴隸を管理するのは私たちの役目だ。気に食わないなら殺しても食つても自由。しかし他所の奴隸は他所の所有物だ。勝手に殺したりしちゃあいけないよ。交換するのはいいけどね。土地も小さくて細かいやつが増えると面倒だから交換することもあるのさ」「なるほど」

母は別の紙を取り出した。

「こ」に奴隸の名前が書いてある。名前の横に数字があるだろう。1の奴隸は従順、2は不眞面目、3は反抗的、4は行方不明だ。数字は私が考えたアイディアだ。賢いだろう？」

「はい。そうですね」

同意しておく。機嫌取りだ。

「面倒だから1の従順なやつらに奴隸の管理は任せているんだ。食糧はできるだけ均等に調達しているが、農耕地の大きさや質も考慮に入れている。まあ話はこの辺でいいだろう。あとは体で覚える」「はい！」

いや、あまり気は進まないけどね。

奴隸一軒目。1評価の家。タコみたいなお爺さんが出てきた。

「ほら、食糧よこしな」

「は、はい。今すぐ持つてきますじゃ」

爺さんはブタを丸一匹持つてきた。なるほど従順だ。

奴隸二軒目。2評価の家。人間の顔の若い夫婦と俺と同じくらいの年齢の娘が出てきた。

「ほら、食糧よこしな」

「は、はい。今すぐに」

夫婦は急いで米俵を持つてきた。しかし中身がスカスカだ。3キロくらいしか重さがない。

「おい。これだけか？」

「ひ、ひいつ。すみません。今年こそは、今年こそは頑張りますから！」

「口だけならなんとでも言えるなあ」

母は嗜虐的な笑みを浮かべながら若い旦那に近づいていく。
そして、腹パン一発。

「うぐえつ」

男は腹をかかえ、うずくまる。

妻と娘は悲しそうに目を逸らした。ん？ 娘の戦闘力が上がった
か？ 戦闘タイプの異星人か？

「飯を用意できねえ奴隸には生かす価値もねえ。畑の小魚でもカエルでもなんでもいいから今日中に袋いっぱい用意しな。できなければ殺す」

「は、はいいつ」

若い夫婦は大慌てで畑に走つていった。

これが2評価か。奴隸の悲しい運命だね。

次に3評価の家。魚と人間を合わせたような顔のおつさんがやつてきた。

「ほら、食糧よこしな」

「ええっ、今日ですか？ いきなりですね」

「黙つて持つて来い！」

「す、すみません」

なるほど。なんとなく反抗的なだな。

おつさんは豆をたらふく持つてきた。生活には余裕があるようだ。

「こんなもんはどうでしよう」

「ふん。上出来だ」

「それでですねえ。最近寒くなつて収穫が落ちてきているので、山の落ち葉を集めたいのですが」

「何に使うんだ？」

「もちろん肥料です。落ち葉が肥料になるくらいもちろん知つてゐるでしょう？」

「チツ、好きにしろ」

「長老に許可をとつてくださいね。いきなり殺されたくないですか
ら」

「どうだかな」

「ええっ、そんなー」

なるほど。うざいが有能そうだな。

こいつに任せれば奴隸全体の収穫が増えるんじやないか？ こいつの小言も増えそうだけど。

このような形で、この日はいくつもの奴隸の家を回つた。

1トン分くらいの食糧を手に入れた。いくらサイヤ人でも一度にこんなにたくさんは食べきれない。母には何か目的があるのであらうか。

昼食中、母が不意にもらした。

「実は、村の女子ども（おんなこども）にも国から徵兵がかかつた。私

も戦争に行く」

えつ、マジか。父はかなり前から戦争に行つてたけど。こんな小さな子を持つ母親まで戦争に参加させられるのか。というかまさか俺も参加か？

「サイヤ人にとって戦いは喜び。私も喜んで戦いに行く。しかしぴギョウ、お前は弱すぎる。お前は村に置いていく。これからは一人で生きていくんだ。修行を怠るなよ。負けることもあるだろうが、必ず勝つまで挑み続けろよ。サイヤ人の誇りを忘れずに。それと、まあ、体に気をつける。毒を使う敵もいるからな」

あつ、よかつた。俺は行かなくていいのか。

でも、二歳で親離れ。厳しすぎる。まあカカロットはもつと厳しい条件だつたけど。

「来い、ゴギョウ」

母は俺を呼ぶ。俺は食事をやめ、母に近づく。母も食事をやめ、そつと俺を抱きしめた。

母の手、母の胸は暖かい。しかし何か寂しい雰囲気だ。母は死を覚悟しているのだろうか。戦況は悪いだろうからな。放つておけばベジータ軍が勝つはずだから。

翌日、村長や母を含めたほとんどのサイヤ人が戦場へ向かった。

村に残ったサイヤ人は村長の娘ダイコを除いて極端に幼い子どものみとなつた。このダイコが500人近い幼い子どもの面倒を見るらしい。無茶だよなあ。異星人がいるとは言つても、暴れるサイヤ人を抑えられるのは彼女だけだろうし。まあ頑張れ。

さて、俺は母から解放されて自由となつたわけだが、なんだかなあ。俺も少し寂しい。口煩くて尊大な母だつたけど、付きつきりで修行してくれたからなあ。顔は怖いけど割と美人だつたし。

とりあえず、逃げる準備だけでもしましようか。宇宙船がどこにあるかについては、俺の試験をやつた科学者に聞いてみようかな？ 例の保育施設にいればいいが。

俺は3キロほど離れた保育施設に到着する。上は10歳くらいか

ら下は〇歳までの子ども達が庭で修行をしていた。村長の娘の姿もある。

「うわあああああん！ マットのやつにまた負けたああああ！」

「泣くな！ 誇り高きサイヤ人ならば！」

5歳くらいのサイヤ人の少年が戦いに負けて泣いている。それをあやす村長の娘。14歳の美少女。

「この野郎！ 死にさらせ！」

「いいぞコリー！ やつてしまえーー！」

「負けるなキヤツ！ 女なんかに！」

そこら中でケンカのような戦いが起きている。学校なら学級崩壊だな。まあサイヤ人だしこうなるよなあ。

おっと、例の科学者発見。俺の試験を採点した地球人のような顔の男だ。

子ども達に何やら教えていた。

「だからですねえ、人間の体というものは栄養でできていましてねえ。これを効率よくとることで効率よく強くなることができるのです。さらには新鮮な水、空気、太陽の光、また精神状態も関係しましてねえ」

「はあ、疲れる。お前の話は長いよ」

「本当に強くなれんのか？ そんなことで」

「なれるなれる！ なれますとも」

「じゃあ強くなれなかつたら死刑な」

「ええつ!? ぼ、僕は村長の友人なのよ!?

「知るかよ。雑魚異星人」

「腑抜け」

口の悪いガキに栄養や人体の構造を教えていたようだ。でもサイヤ人は勉強は嫌いだからなあ。

「先生、ぼく、興味あります！ 教えてください！」

「おおう！ き、君は!? 伝説の！」

「伝説？ それは言い過ぎでは？」

しかし科学者は俺のことを覚えていたようだ。歴代最高得点らし

いからな。しかもたぶん断トツ一位のはずだ。

「てめえ、ゴギョウだな？」

「いけすかねえやつ。いつもいい子ちゃんぶりやがつて」と、科学者の周りの8歳くらいのガキ2人が俺に因縁をつけてきた。恨まれるようなことやつたつけ？

優秀すぎるあまり嫉妬されたのだろうか。

「や、やめないかい君たち！　君たちの敵はベジータ軍だろう？　仲間割れはよくない！」

「チツ、そりだけどさあ」

「お前さあ、調子に乗るのやめろよな！　許して欲しかつたらさ！」

科学者が俺を庇うと、ガキたちは若干落ち着いた。しかし危ないなあ。俺がいくら鍛えていると言つても2歳。8歳のガキに勝てるかは分からぬ。それが2人もいたらまず勝てない。こいつらも怒らせないように気をつけた方がいいな。

科学者は俺を見るととても喜んで、再び同じような講義を始めた。「修行、休息、栄養、新鮮な水や空氣。悔しさや怒りと言つた猛烈な感情。僕の実験データによると、サイヤ人の成長に必要な要素はこの6つだ」

瀕死の体験、を要素に入れるべきだとと思うが。

「君たちの修行プログラムは僕が作る。だから僕を信じてやってみて欲しい。必ず強くなれる。コリーよりも」

「ほ、本当か!?」

「嘘だつたら許さんぞ！」

「う、嘘じやないよ！　本当だよ、本当。だからやつてね。僕のプログラム通りに」

「ふん、まあいいだろう」

「遊びにつきあつてやる」

このガキ共、おっさんみたいな語り口だな。

科学者は実験に興味を持つた子ども達を集め、自分の研究室に案内した。ダンベル、バーべル、握力計、パンチングマシンなどが置いてあつた。

「まずは君たちのデータが欲しい。それから一人一人に合わせた修行プログラムを僕が作る。食事も含めてね」

俺達は科学者の言葉に従い、身長体重、腕力、脚力、気の量、などを計測していく。心理テストも受けた。

結果、俺は試験を受けた子どもの中で唯一のA判定を受けた。年齢を考えるとエリートサイヤ人でもトップクラスの戦闘能力だという。ただしこの上にS判定があり、その場合は王族並みの能力を示すという。俺以外のほとんどの子どもは下級戦士のD判定だつた。試験を受けた子どもは実力に伸び悩んでいる子が多く、実力のある子は村長の娘と修行をしていたから、本当の平均はもうちよい上だと思う。俺は試験の結果を誰にも知られないように意識して行動した。目立たないように隅に移動して、一切は発言をしない。嫉妬は怖いからな。

「明日またおいで。修行プログラムを作つておくから。今日は栄養満点の料理を作る方法を教えよう。まずは素材集めからだ」

その後、俺達は村長の土地を回り、食材を集めていった。森から山菜を採つたり、鳥を仕留めたり、奴隸から調達したり。

最後はキャンプのような形でみんなで料理。俺一人でやればすぐ終わることも、バカなガキが「俺にやらせろ」と言つてぶんどり、しかも失敗するから大変だった。

そしていつの間にか暗くなつており、就寝を迎える。

俺は密かに科学者の研究室へ歩く。科学者は誰かと話をしていた。この声は、村長の娘かな？

「助かりました。ドレッシさんがいてくれて」

「いやいや、僕なんて全然。一番粹のいい子達はダイコちゃんが相手してたからね」

村長の、娘？ 奴隸相手に敬語なのか？ 何故？

それからしばらく話を聞いた。二人は村長の話で盛り上がりついた。どうやらドレッシが村長の奴隸ではなく友人ならしい。ただ、奴隸ということにおいておいた方が、奴隸からの嫉妬がないので安全らしい。やはり嫉妬は怖い。

もう1つ。もしかしてこの2人できるんじゃないか？　喋る時の声の調子が2人ともうれしそう。でもこの場でセツクスはやめてくれよ。おっさんとセツクスする14歳の喘ぎ声なんて聞きたくないぞ。

俺はタイミングを見計らい、ノックをする。

「誰だ!?」

村長の娘が突然人が変わったように低い声で言う。怖い。

「ぼ、僕です」

俺はそろりと入る。

「えーっと、確か」

「ゴギョウくんじゃないか！　伝説の全教科満点！」

「ええっ!?　あのゴギョウくん!？」

村長の娘も驚いていた。科学者から俺の話を聞かされていたらしい。

「ゴギョウくん、何のようだい？　それとも僕じやなくてダイコさん用かい？」

「科学者さんの方に用があります。実は、以前に推薦されていた、科学者の試験を受けようと思いまして」

「えつ、本当かい！？　うーん、でも枠があるかなあ？　戦争が厳しくなって学生も戦争に借り出されているからなあ」

「あつ、そなんですか」

それは残念。でもまだ希望はあるはずだ。

「ドレッシさんは、宇宙船持つてますか？」

「えつ、僕の宇宙船かい？　残念ながら場所は言えないよ。悪戯で壊されたら困るからね」

やはり持っていたか！　奴隸じゃない異星人がいるということは自分の船で来たということ。予想は当たったようだ。

村で修行

「宇宙船に興味があるのかい？ 珍しいなあ」

「まあ、色んな最新技術の集合体ですから」

脱出のために使いたいだけで技術者になるつもりはないけど、ここは技術者になるつもりで言つといった方がいいよね。

「そういう反応が珍しいんだよ。サイヤ人としてはね」

「まあ僕は、戦いが好きなわけじゃないですか」

「えっ!? 本当かい!? きみ、かなり修行しているだろ？ 両親がエリートサイヤ人じゃないのに君がエリートサイヤ人の子ども並みに強いつってことは」

「はい。まあ修行はしますよ。僕も死にたくないでの。でも別に戦いたいわけじゃない。気楽に宇宙を旅する方が楽しそうです」

「へー、そんなサイヤ人がコンサイとダイコちゃん以外にいるとはねえ」

コンサイは村長の名前だ。無口なおっさんだから性格は分かりにくいが、実は戦いが好きではなかったようだ。ダイコもドレッシに対する態度を見る限り、おとなしいようだな。普段は本当の性格を隠してサイヤ人っぽく振舞つてているのだろうか。

「ゴギョウくん。君もだつたなんて」

ダイコがうれしそうに俺を見る。俺も純粹そうな笑顔を作る。

「仲間ですね、僕たち」

「どうだ。この笑顔！ カわいいだろ！」

「うん、仲間だね！ きやーつ、うれしい！」

ダイコは喜び、俺を抱きしめた。ふふふつ、上手くいきそそうだな。

「まあ何にせよ、今は戦争に勝たないとね。夢を叶える前に目の前の敵を倒さないと」

「そうだね」

うつ。ダイコのやつ、逃げる気はないらしい。ドレッシも同意か。

まあそうだよなあ。村の人間が命かけて戦っているのに、自分だけ逃げて楽に暮らすなんて許されないよなあ。サイヤ人はなんだか

んだ仲間意識が強いし。

「そのためにも、修行！ 私だけじゃなくて、村の子ども達みんなでいっぱい修行して、今よりずっと強くなつて、ベジータ軍をやつつけないと！」

「そうだね。僕もできる限り協力する。ゴギョウくんもやってくれるかい？」

「もちろんです」

修行はするけど、負けるだろうからなあ。密かに逃げる準備もしておかないと。

俺はいろいろ考えて、地下室を作ることにした。敵のエネルギー・ボールが村に飛んできたときに、中に入つて身を守るためだ。原作ではピッコロの全方位攻撃に対し、天津飯が気功方で穴を掘つてブルマ達を隠していた。俺もあれをやる。食料も中に入れておく。敵の攻撃で燃えてしまう可能性があるからな。また、地下空間から地下道を伸ばし、秘密の抜け穴も作つておきたい。

根気のいる作業だが、修行だと思えばさして辛くない。亀仙流でも畑を耕す修行はあつたしな。俺はそれに加えて、穴を掘る時に気の刃を使うつもりだ。腕に刃物のような気を纏わせて、地面を彫る。そうすれば気のコントロールの練習になるだろう。うまくいけば気円斬のような技を使えるようになるかもしれない。

早速家に帰り、庭に穴を掘り始める。

手のひらに気を集め、鋭い爪のような形に圧縮していく。そして、それを地面にぶつける。

「うわっ」

地面にぶつけた瞬間、気が弾けた。爆発の勢いで俺は2mほど飛ばされてしまう。ダメージはさしてないけどね。

難しいな。もつと圧縮しないといけないのか。

もう一度挑戦。手に気を纏い、刃物のような形に圧縮し、圧縮を意識したまま地面にぶつける。

「うつ、と」

地面をザツクリと掘つたところで、圧縮を続けることができず刃物

は消えた。しかし爆発はしなかつたぞ。いきなり進歩した。この調子で続ければ完全な穴堀の刃ができるだろう。

そうして眠くなるまで掘り続けた。3時間ほどで深さ3mくらいの穴になつた。気を刃にするのはできるようになつたが、気を運用する効率がとても悪く、ドッと疲れた。穴を掘りながら眠ってしまった。

翌日。ゆっくりしてから保育施設に向かう。早寝早起きは嫌いだからな。重役出勤だ。

ドレッシからトレーニングメニュー受け取る。ほとんどは保育施設でやつてているのと同じだが、重りトレーニング、医療カプセルによる休息、徹底した食事コントロールというのが違うな。こういうのはやってみたかった。そこそこ効率がよさそうだ。

ドレッシの指示に従い、トレーニングをこなしていく。

筋トレが多い。なんか動きが型に嵌つてるなあ。柔軟性がなくなりそう。適当にねじりとかも加えておこう。

食事は新鮮なものを村長の土地から提供してもらう。食材を集めのも料理を作るのは村長の使用人達だ。これがとてもおいしい。うちの母親の料理は適当だったからな。土地は瘦せてるし。奴隸もやる気ないし。

毎日毎食ここで食べたいが、それはいかないだろうな。いくら村長の土地が広いと言つても、いつまでも村長の土地だけで賄えるわけではないからな。いつかは限界が来るだろう。いや待てよ。俺の奴隸をここで働かせて、ここで料理を作らせたら、いつまでも美味しいもんが食えるんじゃないか？

俺はダイコに頼むことにした。が、ダイコは他の子供の世話に忙しく、話しかけるタイミングがなかつた。ドレッシに伝言を頼むことにした。

「ドレッシさん、うちの奴隸をここで働かせて、料理を教えて欲しいのですぐ」

「うん？ ああ、それについては、もつと大きな計画を考えっていてね」「どうしたことですか？」

「今僕の修行メニューをこなしているのは君たちだけだけど、いずれは村全体でやつてもらうつもりなんだ。そうすると村長の土地だけでは、栄養豊富な食事も医療ポッドもいきわたらなくなる。だから村全体の異星人にも協力してもらいたいのさ。栄養豊富な食事や新しい医療ポッドを生産することに」

「なるほど。それはいいですね。僕の奴隸に話しておきましょう」「そうだねえ。本当は君たちに結果を出してもらつてから、食量や医療ポッドの生産体制を整えるつもりだつたけど、計画を早めようかな？ その方が効率がいいからね」

そうして話を打ち切り、俺は修行に戻つた。

ドレッシはこの日の夜にダイコに計画の前倒しを伝えたようだ。翌日、保育施設へ向かうと、ダイコが子ども達を並べて話をしていた。「あなた達の使用人をこの保育施設に連れてきてください！ 医療ポッドや新しい農業の計画を伝え、実行させます！ 今まで異星人には単純に仕事をしてもらつていましたが、計画的に行つた方が効率がいい！」

この村の子ども達はなんだかんだ村長の娘を信頼している。指示に従わない子もいたが、概ね全ての子がそれぞれの奴隸を連れてきた。俺も全員連れてきたぞ。

奴隸に對しては、村長の使用人が計画を伝えていた。ドレッシ当人は俺たちの修行のトレーナーだ。

そうして使用人（奴隸）にとつて新しい生活が始まる。サイヤ人は相変わらず特訓だ。

1ヶ月後、修行の成果を見ると言つて、村で武道大会が開かれた。対戦は一対一の形式。対戦相手はダイコが指名する。が、裏で指示しているのはドレッシだ。ドレッシの命をつなぐため、ドレッシのトレーニングを受けた子どもが全勝できるような、それでいて1ヶ月前で比べると若干分が悪い相手にぶつける。

俺の相手は8歳の少年だつた。俺より6つも年上だ。この子は父親がエリート戦士で、母親はふつうの戦士。この子自身も子どもとして

てはエリートと下級戦士の真ん中くらいの戦闘能力を持つ。

「チツ、ガキが相手かよ」

「はあ。なんでこんな強そうな相手と戦わないといけないのか」

向こうの方が30センチくらい背が高い。

しかしドレッシは俺が勝てると判断しているらしい。まあ気は俺の方が多いかもしれないが。でも全力で気を開放するとスタミナがもたないんだよなあ。

「始め！」

まあ、全力でやるけどさ。

「ずええい！」

「何!?」

俺は全力で気を高め、少年に飛び込む。そしていきなり腹パン。油断していた少年はまともに受ける。油断してなくとも俺の方が速いから避けられないかもしないけど。

「ふんぐううつ」

「ずえい！ つえい！ オラア！」

俺は腹にもう一発アッパーをぶち込み、最後には顎を蹴り飛ばす。どうだ？ これで終わつたか。

「ぐつ。くそつ。調子に乗んなよ！ ガキがあああああ！」

少年は口から血を流すが、まだまだ元気いっぱいだ。叫びながら突っ込んでくる。

強引な右ストレート。そしてハイキック。俺は下がつてかわす。少年は俺を追いかけ、先ほどより狙い済ましたジャブを放つ。

くそつ、冷静になつてしまつたか。強引な右ストレートにカウンターを合わせるべきだった。いきなりだつたからチャンスを逃してしまつたな。

というか、こいつ動きはかなり雑だな。身長が同じならいつでも力ウンターできる。でも今は俺の腕の方がかなり短いから難しい。

「卑怯もんがあ！ 逃げるだけか！」

「いい子ちゃん気取りがよお！ 逃げるだけじゃねえか！」

「弱虫！ 弱虫！」

「サイヤ人の恥さらしめ！」

外野がうるさいな。その全てが俺より年上で且つ俺より弱いの子ども。やはり優秀過ぎるゆえに嫉妬されているのだな。

だが残念、俺は勝利への道筋を見出してしまったぞ。

「ほい」

「がばはあ!?」

俺は相手のパンチに合わせてカウンターのパンチを放つた。腕は届かないでのパンチに合わせて気弾をぶちこんでやつた。初めてだがうまくいった。穴掘りで手のひらに気を纏うのには慣れていたから。

少年は溜まらずダウンした。

対格差のために俺の攻撃は軽いのだが、カウンターはさすがに効くようだ。しかも気弾なら体重はあまり関係ないしな。

「あ、当たって、なかつたはず。何故だ!?」

少年はよろよろになりながら立ち上がつた。

「そいつはエネルギー弾を撃つたんだ！」

「気をつけろ！　パンチに合わせて撃つてくるぞ！」

少年は気付いていなかつたが、観衆が種明かししてしまつた。まあ気付かれたからと言つて防げるもんでもないけどさ。カウンターだから。

「なんだと!?　このガキめえ。味な真似をしやがつてつ！」

少年は叫ぶと、よく分からぬ構えをした。

「俺に二度同じ策が通じると思うなよ！」

少年は叫び、俺に突っ込んできた。今度は重心を後ろにしており、蹴りやジャブが中心だ。カウンターは仕掛けづらい。しかし避けるのは簡単だ。持久戦になりそうだな。ああ、一番嫌なパターンだ。

少年は重心を後ろにしたまま鋭い攻撃を重ねる。俺は時たま殴ると同時に気弾を放つて攻撃する。少年の攻撃はほぼ当たらず、俺の攻撃はけつこう当たる。しかしカウンターのようにうまくは決まらない。決定打にならない。

結果、俺が不利な状況に追い込まれていく。思つたより早く体力が

ついてきたのだ。

「ぜえ、はあ、はあ」

攻撃に気弾を使っていたせいで。あれでいつもより体力が無くなるのが速かった。

「へへへっ。俺はまだまだ行けるぜ。はあ、はあ」

対して、少年は軽く汗を流す程度。

もう無理です。ぼく負けます。

でも、こんな後ろ向きの戦法で負けるのは情けないな。最後は華々しく散つてやろう。

大きなダメージを負つてしまふかもしねいが、それもパワーアップのためには吉だ。

「うおおおおおおおお！」

「何!？」

突然、俺は少年に飛び込んだ。

驚いた少年は一瞬反応が遅れる。俺の拳が顔に当たるが、浅い。やはり腕が短いから決まらない。少年の後ろなのも災いした。

「こなくそ！」

少年の反撃。俺の顔面に命中。首をひねつて衝撃を和らげるが、首が短いから大して軽減できない。

「うふううううううう！」

「く、ぐつ、つえい！」

少年の連續攻撃。パンチにキックが雨霰。

とても痛い。俺はガードしつつ反撃の隙をうかがうが、やはりリーチの差がしんどい。反撃しても届きそうにない。ガードしている腕の骨が軋む。ガードの隙間から顔を打たれ、鼻血が流れる。痛い。本当にボロボロだ。

「やれやれー！」

「いいぞマット！ やつてしまえ！」

観衆もうれしそうだ。

「はあ、はあ。へへへっ」

と、観衆に釣られたか、少年がうれしそうに笑つたぞ。そして重心

が前に来た。

勝てると思つて慢心したな。踏み込んできたぞ！ 右ストレート

だろ？

「つえええい！」

「ぐばはあああっ！」

俺は最後の力を振り絞るつもりで、渾身の氣弾ストレートを放つ。それは見事少年の顔面を捉え、吹き飛ばす。

よし来た。大チャンス！

俺は吹き飛んだ少年の下へ掛ける。

起き上がるうとする少年。俺は急いで上に乗り、マウントポジションを取りつつ、殴りつける。もういつちよ殴りつける。ぐつ、向こうも殴り返してきた。

「んげつ」

「べへえつ」

殴り合いになつた。向こうはガードを無視して全力で殴りかかってくる。俺もマウントポジションというチャンスなので、ガードを無視して応戦する。

ここからは精神力の勝負。俺もなんか燃えてきたぞ。ここまで痛い思いをしたのだから勝ちたい。ここは負けたくない！

「ぐつ、ぐはつ、ぐうつ」

「ずえいっ！ かはつ、死にやがれ！ あうつ」

何度も何度も殴りつける。しかし向こうも全く引かない。獣のような眼光で俺をにらみつける。サイヤ人の本能丸出しだな。

いいだろう。とこどん付き合つてやるよ！

「ひやああああ！ ゾッ、ゾッソやあああ！」

殴る殴る殴る。頭の中はそればかり。いつしか痛みさえも忘れていた。

そして気がつくと、俺は医療ポッドの液体の中にいた。

「気がついたかい？ 全く無茶をする」

ドレッジの声が聞こえた。

「俺は、負けたのか」

俺がここにいるということは、そういうことなのだろう。

とても悔しい。勝ちたかった。

以前はああいう血まみれの野蛮な戦いはしたくないと思つていたが、そういう嫌悪感は全くない。いい気分だった。楽しかった。でも負けたからケチがついた。気分が悪い。悔しいな。

「まあ、マツトくんが先に目覚めたという意味では、君の負けだけどね」

ドレッジは俺の隣の医療ポッドをとんとんと叩いた。そのポッドの近くに血溜まりが見える。マツトも氣絶してここに連れられていたのだろうか。だったら勝負は引き分けと言うべきかもしれないな。多少悔しい気持ちは薄れる。でも、薄れるのもよくないな。この悔しい気持ちは今後の修行の糧にした方がいい。

「体に不調はないかい？ 治療できる分は治療したけど」

俺はこくりとうなずいた。

液体が抜かれ、医療ポッドが開く。呼吸器が外れ、他の拘束も解かれる。

俺は医療ポッドを出て、軽くストレッチする。特に異常はないようだ。

待てよ。

「ふんっ」

よし、予想通りだ。

「どうかしたのかい？」

「エネルギーを高めてみました。強くなつてるかなつて」

「戦闘中に何かつかんだのかな？」

「まあ、そんな感じです」

「それは行幸」

後でそれとなく教えよう。サイヤ人は死の淵から蘇ると強くなるのだと。

ところで、施設の外へ出てみると、辺りは夜だつた。俺はずいぶん長く気絶していたらしい。

左手に光を、右手に剣を

サイヤ人の戦闘は数々の災害を起こしてきた。

突然の大地震。突風。どこからともなく飛んでくる巨石。火山灰のような厚みのある埃。

犠牲者の数も少なくない。奴隸の子どもが突風に飛ばされ、岩に激突して死ぬ。奴隸の家が大地震や巨石で壊れ、下敷きになつて死ぬ。空を覆う埃は目や肺に入り込み、人体を内側から攻撃する。不調を訴える奴隸たち。サイヤ人でさえ病気になつてしまふ。埃は太陽光を遮り、気温を著しく下げる。さらには大地に積もつていく。植物が死んでいく。光が照射可能なビニールハウスを除いて、食糧となる植物も死んでいく。

生まれた時から災害は起こり続けていたが、最近は特に酷くなってきた。戦闘が近い。

俺がマットとの戦いで気絶してから1年。ここにサイヤ人の子どもも次々と徴兵されていき、今では残った子どもの平均年齢が3歳となっていた。ちょうど俺の年齢だ。サダラ王はいよいよ追い詰められているようだ。

村長の娘であるダイコはギリギリのところで徴兵を拒んでいたが、彼女も徴兵されてしまつたらこの村は終わりだな。

俺の戦闘力はそれなりに上がつたと思う。一瞬だけ高められる全効の戦闘力なら大人の下級戦士にもダメージを与える。もつとも、俺の場合は斬撃系の技があるから、そつちの方がサイヤ人に有効だけどね。

むしろ最近は斬撃系の練習ばかりしている。まつとう強くなるには時間が足りないから、今すぐ大人のサイヤ人と戦えるようになろうと思うと、斬撃がいいかなつてな。その分、ドレッジの下での修行は減らしている。

修行方法は主に手に剣の氣を纏つて穴を掘りまくるだけ。災害のせいで奴隸の生活が厳しいので、畑を耕したり機械動かすのを手伝つたりもしている。そのために奴隸には感謝されている。心配もされ

ているがな。徵兵を考えると、修行した方がいいのではないかとね。その度に修行の一環で力仕事をしていると答えている。

「ゴギョウくん、本当にドレッシャンのところで修行しなくてもいいの？」

「この穴掘りも修行だからね。気にしないで」

この日、俺は奴隸が働くビニールハウス付近に穴を掘っていた。奴隸が身を隠すための穴だ。敵に発見されるのを防ぐというより、戦闘の衝撃波や飛来する岩で死なないように身を隠すための穴。特にこのビニールハウスは規模が大きく、美人の奴隸も多いので、念入りに作つておく。

ん？ 何か近づいてきている？

俺は原作のZ戦士ほど気を読むのがうまくない。しかし、サイヤ人は気が大きく、出しつぱなしなので、よほどの雑魚でなければ気付ける。

そして今、確実に複数のサイヤ人がこちらに向かつて高速で近づいてきている。嫌な気だ。おそらく敵！

「お前達、早く穴の中へ逃げろ！」

「えつ」

「敵だ！」

俺が叫ぶが、奴隸達は反応は鈍い。

「ちつ」

「えつ」

俺は付近の女を抱きかかえ、穴へと飛び込む。

「いたつ」

女を乱雑に置き、急いで穴を飛び出る。再び女を抱きかかえ、穴へと入る。

「うつ」

「わつ」

「きやあつ」

次々と穴へ入つて行く女達。男は知らん。

こここのビニールハウス内の女を全て穴へ入れた。男は無視して別

の場所へ移動する。

次いでやつてきたのは工場。男達が医療ポッド、ビニールハウス、農業機械なんかを作っている。

俺はドアを蹴破つて中に入る。

「お前達！ 早く隠れろ！ 敵襲だ！」

「なつ!?」

「ちよつ、ちよつと待つて！ 機械を移すから！」

「ちつ」

大慌てで近くのシェルターへ逃げる男達。ここはとても重要なので特別なシェルターを作っているのだ。

男達の一部は高価な機械を動かそうとしているが、動きがとても遅い。

「貸せ！」

「あつ」

「す、すみません」

男たちから機械を奪い、俺がシェルターへ持つて行く。

何度も工場とシェルターを往復し、重要な機械を確保して行く。

そんな時だつた。

例の保育施設の辺りに邪悪な気が止まつた。そして数秒後、大爆発

が起こつた。

「うぎゃあああああああ!?」

「戦闘が始まつたか!? に、逃げろ！」

工場に残つていた男たちが一斉にシェルターへ逃げて行く。

俺も、戦いに行つた方がいいだろうな。

正面から戦うと危ないから、狙いは暗殺だけど。

空を飛べば敵に見つかってしまう。地べたも安心はできない。しかし地下ならば絶対に見つからない。

俺は自分で作つた地道を通り、戦場へと急ぐ。地面は真っ暗だが気弾出しておけば光源になるので問題ない。地震の影響で潰れていたり地下水が溢れていたりするが、そこは強引に突破する。

そうして保育施設付近に到着。上方から爆発の振動がひつきりな

しに響いてくる。あまり出たくない。だが、逃げるだけというのもね。せつかく斬撃技を覚えたのだから使いたい。

恐怖を押し殺し、地上へ上がる。ぴょこんと顔を出す。ここから保育施設までは1キロくらいだ。

「うつ、がほつ」

地上は砂埃に溢れて、視界が全くなかった。戦闘の激しさを物語る。

視界はないが、俺は気を追うことができる。上空にいくつもの氣がある。

敵は、8人か。やばいな。数は少ないが全員まつとうな戦闘員だ。うちの平均3歳の子どもの戦闘力じや相手にならない。今もバツタバツタと死んで行く。

頼みの綱のダイコは、敵の一一番強いやつと戦っている。この気の大きさはエリートサイヤ人だろうな。ダイコもエリートだが気の量は僅かに敵の方が多い。

これ、勝てるのか？ 俺一人で。無理っしょ。逃げよう。

でも、実験してみるくらいはいいんじゃないか？

俺が編み出した暗殺技。使わずに逃げるのはもつたいない。

「ぐ、ぐぬぬぬぬつ」

技1、気円斬。

クリリンのと同じやつだが、作るのにとても時間がかかるし、遅い。たぶんクリリンの気円斬より大分質が劣る。

「はあ、はあ、はあ」

約1分で一個完成。右手の上に準備しておく。

「ぐ、ぐぬぬぬぬつ」

そして技2、縲氣閃光弾。

ヤムチャの縲氣弾と天津飯の太陽拳を合わせた技。ヤムチャの縲氣弾と違つて遅いし攻撃能力もないが、ピカッと光るぞ。

「くくくつ」

右手の気円斬。左手の縲氣閃光弾。

閃光弾で目を眩ませているうちに気円斬でザクッと切つて殺す。

完璧だ。我ながらえげつない技を考えついたものだ。

しかし、何度も同じ手が通用するわけではないだろう。一度見られたら二度通用するかは分からぬ。だから、一撃で決めて、しかもこの戦いの勝利を確定させたい。

ならば、敵のボスを殺すしかない。

高速で動く敵のボスとダイコ。俺の実力では2人の動きを捉えることさえ難しい。目で見るにしても、気を追うにしてもだ。

しかし、いつまでも高速で動くわけではない。時々ボディブローが響いて止まつたり、岩にぶつかって止まつたりする。そこを狙うしかない。

「ふんっ、雑魚が」

「ぐあああっ！」

敵のおつさん。長髪でムキムキの大男がダイコを蹴飛ばす。ダイコは隣の山まで飛ばされ、その山にぶつかることで山を吹き飛ばす。それでやっと動きが止まる。

「その程度か！ サダラの女は！」

山に向かつて叫ぶおつさん。

「おいおいタスレ！ いい女なんだから殺すなよ！」

「がははははっ！ こいつらガキばつかで戦いにもなんねえからよ！」

「女で楽しもうぜ！」

村の子どもと戦っている敵のおつさんが、上空のリーダー格へと叫ぶ。

彼等はかなり余裕がある。ダメージ1つ負つていない。

いや、一人だけ苦戦している男もいる。というか負けてるな、あの男。エリートサイヤ人の娘、コリーに。単純にコリーの方が気が大きいし戦闘の才能もありそうだ。あれは楽に勝てるだろうな。コリーは戦いが嫌いだからなかなか止めを刺そうとしないけども。

他の敵は、コリーに負けている男に対し、加勢する気配はない。一対一だし相手が女の子だからな。サイヤ人の誇りかな？

いずれにせよ、相手のボスの動きが止まつている。今がチャンス！ 食らえ、繰氣閃光弾！

左手からバシュッと閃光弾を放つ。そいつは真っ直ぐ敵のリーダーに飛んでいく。

「ん？ なんだこのへロヘロのエネルギー弾は？」

敵のリーダーは不思議そうな顔をして、片手を気弾に向ける。軽く掴んで押しつぶすつもりらしい。

弾けろ！ 閃光弾！

「うおつ。眩しつ」

「うえつ」

「鬱陶しいなあ。誰がやりやがった」

よし、閃光弾成功！ 僕も光のせいで目は見えないが、おそらく敵も同じ状態のはず。

だが、俺は気の気配で相手の位置が分かる。
行け、気円斬！

投げてすぐ、その場を移動する。気円斬が万一かわされてしまつた場合、気円斬が飛んできた方向から俺の居場所がつかまれ、爆撃されるかもしれないからな。

ささきつと敵のいない方向へ移動する。且つ、ここには俺の作った地下道があるので入つておく。

おつ、感じるぞ！ 敵のリーダーの気がガクンと落ちた！ もう死にかけだ！

よし！ 僕は賭けに勝ったんだ！

7人の敵

「ちつ、なんだつたんだあの光は」

「無事か、タスレ」

楽勝のはずだつた。新兵器スカウターで敵の戦力を分析し、ベジータ軍が必ず勝てるよう計算されているはずだつた。

「ゴ、ゴフツ」

しかし、今回派遣されたコンサイ村討伐隊8名。その中でも最も戦闘力の高いタスレは、口から血を流し、力なく地面へ落ちていく。「な、何が起こつた……？」

突然の腹部への激痛。しかし痛すぎて安全装置が働き、一瞬でその痛みが消えていた。

だからタスレにはわけが分からなかつた。突然、腹から下へ力が入らなくなつたという感じだつた。

首を傾げ、己の下半身へ目を向ける。そこには、あるべきはずのものがなかつた。

「タ、タスレッ！　お前！」

「タスレの兄貴いいいいいい！」

今まで連れ添つた仲間たちが、下半身を失つたタスレを見て驚愕する。

タスレはそこで再び激痛に襲われる。そして苦悶の表情で目を瞑り、程なくイッた。

「兄貴いいいいいい！」

「誰だ！　誰がやりやがつた！」

「あの光つている隙に攻撃されたのか!?　卑怯者め！」

残つた男達は光る氣弾が飛んできた方向に目を向ける。しかし誰もいない。

その周辺にも誰もいない。

「まさかこいつらが?」

平均年齢3歳のチビ共。ほとんどが死んでいるか、死の恐怖で足が止まつている。動いている者も一人を除けば子どもの実力であり、と

てもではないが7人の大人のサイヤ人にダメージを与えられない。その一人はとある残つた7人のうちの一人と今も交戦中。

その一人はとある残つた7人のうちの一人と今も交戦中。

タスレと戦っていたエリートサイヤ人の娘は、山のふもとにいる。よろよろと歩いており、ダメージは深い。あの状態から一撃でタスレを殺せるとは思えない。

「おまえが！ 奴隸共！」

「そうだ！ 違いない！ あの妙な光る玉、そしてタスレを切つた攻撃！ サイヤ人の技にしては妙だ！」

男達は、コンサイ村の奴隸の科学者あたりが、兵器でタスレを殺したのだと考えた。

形で殺されたことになる。

生かしておけん！ 一人残らず！

成開口の二ノ三番の一六、歳一の十八、ハジ開口の廿

残りのサイヤ人が周囲の木へ攻撃を始め、
戦闘中の一人を除いて

近玉

近年はヘンリタ軍も食糧不足であるため、たびたび村への被害を避けて戦闘していたのだが、一度攻勢に回ればあつという間だ。煙も建物もエネルギーボール1つで吹っ飛ぶ。吹っ飛んだところへさらりに別のエネルギーボールが飛んできて、地面を抉り取る。何度も何度も抉り取る。巨大なきのこ雲がいくつも上がる。もはや村にはクレーターや外に何も残っていないだろう。爆発の余波で平均年齢3歳のナイア人の子ら大勢死んでしまった。

「き、貴様らああああああああああああああ！」

ダイコが怒りの声を上げ、6人の敵に突っ込んでいく。

「袋叩きにしてやる！ もはや女と言えども容赦はせん！」
そして、ダイコと6人の戦いが始まった。

ダイコは手近な男を狙い、打撃を繰り出す。

しかし男はまともに戦おうとせず、回避と防御に全てを回す。

その間、別の男達は、ダイコの横や後ろに回り込み、エネルギー弾を放つ。

「ぐああああっ」

エネルギー弾が後ろからダイコに命中。ダイコは弾かれ、飛ばされしていくが、その間にも別のエネルギー弾が命中する。

さらにはそこに回り込んで別の男が蹴飛ばす。また回り込んで別の男が両腕で叩き落す。

「ぐはっ」

地面に埋まるダイコ。ダメージで上手く動けない。

「終わりだ！」

「死ねえ！」

そこへ、6人から一斉に必殺のエネルギー弾が放たれる。

「ぐつ」

避ける暇はない。ダイコは最後の力を振り絞り、全身に気を纏う。

エネルギー弾は次々とダイコや付近の地面に命中し、大爆発を起こした。

「ぐがつ」

「ぐふつ」

勝利を確信していた6人。しかし突然、そのうち2人が血を吐いた。

「くそつ、がつ」

「円盤、あっちから……」

2人はタスレと同じように下半身を失っていた。ダイコへ全力でエネルギー弾を放つていて、横から飛んできた円盤にまつ二つされてしまつたからだ。

死に行く二人。しかし最後の力を振り絞り、円盤が飛んできた方向へエネルギー弾を放つ。

「し、死にやがれえええええ！」

「ちつくしよおおおおおお！」

エネルギー弾は円盤が飛んできた方向へ着弾し、再び大爆発を起こした。

もつとも、円盤、もとい気円斬の投擲者は、投げてすぐに移動していたため、爆発から逃れたが。

と言つても、ゴギョウは無傷ではなかつた。村の奴隸を殺すために何度も放たれたエネルギー弾。あの余波はゴギョウが隠れる地下道にも届いていた。

ゴギョウは片足を骨折し、背中に大きな火傷を負つていた。その状態で、何とか両腕に気円斬を作り、敵が攻撃に集中しているタイミングを見計らい、見事二人を仕留めたのだ。

ゴギョウには、地下に潜つて時間を稼ぎ、隙を見て夜にでも逃げるという選択肢もあつた。しかし足と背中に大きなダメージを負つてしまつた。早く治療しなければ死んでしまうかもしれない。この村にある医療ポッドを使いたい。なんて思惑が、ゴギョウに戦闘を選択させた。

と言つても、正面から戦うつもりはない。まだそのやり方では勝てない。

ゴギョウは戦場の気を探る。

ダイコの上空の4人は、エネルギー弾を撃ちまくつたために気が2割ほど落ちてゐる。しかし戦闘は十分に可能だ。ダイコは生きてはいるが、著しく気が落ちてゐる。もはや戦えそうにない。

コリーが相対する男は死にかけだ。こちらももう戦えないだろう。コリー自身にほとんどダメージはない。彼女は戦える。

コリー以外の子どもは、3人、気が十分に残つてゐる子がいる。しかし3人とも、絶望的な力の差に怯えてしまい、戦う様子がない。となれば、4対2。それも、表立つて戦うのはコリーのみで、ゴギョウは隠れて攻撃する。

4人の敵は、慎重にあたりを警戒していた。8人いた彼等のうち、3人が奇怪な技により即座に命を奪われてしまつたのだ。警戒する

なと言うほうが無茶だろう。迂闊に行動できない。

静寂があたりを包む。あたかも戦闘が終わつたかのような静けさ。
4人はいすれも気を張り詰めており、顔は真剣そのもの。

「あ、あの」

コリーが小声で言う。4人の男達はまつたく反応しない。
「も、もうやめようよ！ こんなこと！」

コリーは勇気を振り絞り、大きめの声で叫んだ。しかし4人の男たちの反応は同じ。

コリーの声にも警戒はしているが、はつきりと首を傾けたりはしない。それが隙となつて例の円盤に狙われるかもしれないからだ。

「わ、私降参するから！ それならいいでしょ！ もうやめようよ！」

コリーは涙ながらに訴える。負けてもいらないのに降参。それはサイヤ人としては絶対にやつてはならないこと。それが分かつており、受け入れられない確率が高いとも分かつており、死んだ仲間が戻らないことも分かつており、いろいろな意味で涙があふれたのだ。

「ちつ」

そんな彼女へ、男の一人が舌打ちしながらエネルギー弾を放つ。
ガキの戯言に耳を傾ける気はない、という感じだ。

「ううつ」

コリーは涙拭いながら、片手でエネルギー弾を弾いた。

男のエネルギー弾がさして力を入れなかつたのもあるが、もともとコリーはエリートサイヤ人の子ども。男の全力のエネルギー弾も、コリーが全力で迎え撃てば片手で弾けるだけの力の差があつた。

「どうする？ この娘」

「1人で戦うのは辛そうだ。連携でし止めるぞ。ベツキヤ、オニオ、援護してくれ。パセリは円盤の警戒を」

「ああ」

「分かつたぜ」

「任せろ」

1人が提案し、残りの3人が短くうなづく。そして3人は動き出した。

「いやああああああああ！」

戦闘が再開してしまったことに、コリーは泣き叫ぶ。

「チツ、情けないやつ！」

「戦場で泣いてんじやねえよ！ サイヤ人の面汚しめ！」

3人は逆に怒り、コリーに攻撃をしていく。

「オラオラオラ！」

まずは様子見の気弾。コリーは片手で軽く弾いていく。

「くらえつ！」

両腕を交差させ、勢いをつけてタックルを仕掛ける。コリーはサツと横に飛んでかわす。

「はつ！」

「つあつ！」

そこを狙った2人同時のエネルギー弾。コリーはやはりそれぞれを片手で弾いていなす。

「チツ、強えじやねえか」

「いらっしゃるぜ。こんなやつがエリートとはな」

「だが、戦う気がなければ宝の持ち腐れだ！」

3人は不満を言つてから、目配せする。そしてコリーを囮むように展開し、3方向から同時に突っ込む。

コリーはギリギリまで突つ立つていたが、敵の拳が当たる寸前でジャンプする。

「あつ！」

しかも、ジャンプしながら男の腕を軽く払い、別の方向から迫ってきた男の顔へと向いた。

「ぐえつ」

「す、すまん」

男の腕は勢いよく別の男へと命中。カウンター気味に決まり、別の男に大きなダメージを与える。

「チツ」

もう1人の放つた蹴りはジャンプによつてかわされてしまった。

それから何度もこんな攻防が繰り返された。コリーから攻撃を仕

掛けることはなかつたが、3人はそれぞれの攻撃をいなされ、同士討ちのような形でダメージを受けた。また、自らのエネルギー弾を原因に徐々に体力を失つていった。

「はあ、はあ。なんだこいつ？ やる気あんのか？」

「全然、当たらん。ぜえ、ぜえ」

「調子狂つちまうぜ。逃げるばかりだからよお。はあ、はあ」

逃げてばかりのコリーやは、ほぼダメージなし。体力もまだまだ余っていた。

「もうやめようよ！ こんなこと！ 私は戦いたくない！」

そして、再び停戦を提案。コリーやは真剣そのものなのだが、それが逆に男たちの激情を誘う。

「お、お前が言うなあああああ！」

「エリートのくせに！ お前に俺たちの気持ちが分かるのかあああああ！」

「こつちはお前を殺したくてたまんねえんだよおおおおお！」

再び、会戦。

防御を無視して全力で攻める男達。攻撃を無視してひたすら防御に徹するコリー。

少しずつ、コリーにかすり傷がついていく。しかし致命傷には至らない。むしろ男達の体力がハイペースで失われていく。

「こ、こいつ」

「認めるしかねえ。こいつは戦闘の天才だ。はあ、はあ、はあ」

「どうする？ はあ、はあ、はあ」

男達三人は目配せをする。そして一旦コリーから距離を取り、3人集まって話し合う。

話が纏まつたところで、3人揃つてにやりと笑つた。

「おいお前、喜べ！ 戰うのを止めてやる！」

「えつ」

「その代わりベジータ軍に入れ！ お前ほどの実力ならベジータ王も

無碍にはしないだろう！」

突然の提案。戸惑うコリー。

しかし、コリーは構えを解いた。

「分かりました。ベジータ軍に入ります。それで無益な戦いを避けられるのなら」

「なつ」

僅かな生き残りの子ども達は驚愕した。憎きベジータ軍に入るなどありえない。死んだ方がマシだと教えられてきた。

「くくくくつ」

「ぐひひひひつ」

作戦成功。3人の男達は嫌らしい笑みを浮かべる。

「おいパセリ！俺はこいつ連れて本部に戻るからよ！お前は円盤野郎を殺してから戻つてこい！」

「なつ！お前達も探せよ！」

「悔しいが、このガキは強いからな！3人で連行しないと安心できません！」

「……チツ。まあいいだろう」

そんなやり取りの後、3人はコリーを連れて去つていく。

残つたのはパセリという名のサイヤ人、数人の子ども、死に掛けのダイコ、そしてゴギョウ。

パセリは村をグルリと見回す。荒れ果てた大地。破壊された家の瓦礫。サイヤ人の子どもや奴隸の死体。が目に映る。

「円盤野郎を探せつてもなあ。この広い村をいちいち調べてられん。かと言つてやみくもにエネルギー弾を撃つても疲れるだけだし」
パセリはげんなりした。腕を組み、うんうんと考え込んだ。

今だ！

ゴギョウはさつと地下から飛び出し、ダイコを回収。再び地下へと入つていった。

「もういいや。闇雲にエネルギー弾を撃つておこう

そして程なく、パセリによる空爆が始まった。

パセリは長々と、村の隅々まで細かくエネルギー弾を撃つていった。爆発で舞い上がつた灰が落ちてくると、空から村をざつと見回し、特に何かを見つけることもなく、本部へと帰つていった。